

## ヤロー川詩情：“The Braes of Yarrow”

山中光義

I



William Hamilton of Bangour (1704-54)<sup>1</sup> 作 “The Braes of Yarrow” (初出、Allan Ramsay, ed., *The Tea-Table Miscellany*, 1724)は、その副題 (‘In Imitation of the Ancient Scots Manner’) の示すように、伝承バラッド “The Braes o Yarrow” (Child 214)を元歌としている。家族から認められない夫 (ないし恋人) がヤロー川の土手で決闘の末に果ててゆくという物語で、Sir Walter Scottの*Minstrelsy of the Scottish Border* (1803)で初めて世に紹介された有名なボーダー・バラッドである。F. J. Child は、断片的な2編を含めて16の異版(A～P)を編集しているが、スコットの版はE (b)版として収められている。

---

<sup>1</sup> スコットランド Linlithgow 州 (旧 West Lothian 州の旧名、1975年に旧 East Lothian, Midlothian 両州と合わせて Lothian 州となる) Bangour出身。ジャコバイト派詩人としてプレストンパンズの戦い(1745年)の勝利を称えた“Gladsmuir”は有名。カローデンの戦い(1746年)のち、一時ハイランドに身を隠し (cf. “A Soliloquy Wrote in June 1746”)、その後フランスに脱出、のち、一端はスコットランドに戻るが、ひどく健康を害して療養のためにリヨンに移り、そのままリヨンの地で肺炎のため亡くなる。死体はスコットランドに運ばれて、ホーリーロードのAbbey Church に埋葬される。

瞑想詩 “Contemplation, or the Triumph of Love”は、その深い思索と巧みな技法から、優れた作品として高く評価されている。ギリシャ・ラテンの詩人からの翻訳もある。スコットランドの国花アザミの歴史を語る “Episode of the Thistle” は叙事詩的力強さと品格にあふれ、Hugh MacDiarmidの*A Drunk Man Looks at the Thistle* (1926) に先駆けるものであったと評価される。しかし、William Wordsworthの言及もあって、今日彼の名を文学史上に残す最大の貢献をなしたのは、本論で取り上げたこのバラッド詩である。(Cf. ‘Hamilton, William,’ *The Dictionary of National Biography*, Vol. 7, ed. Sir Leslie Stephen and Sir Sidney Lee, London, Oxford UP, 1973)

る。これは、主としてJames Hoggが手渡した手書きのもの(E a)に基づいているが、例によって編者スコットが他版からも借用していることはチャイルドが指摘する通りである。<sup>2</sup> スコットは、作品の解説の終わりで、

“It will be, with many readers, the greatest recommendation of these verses that they are supposed to have suggested to Mr Hamilton of Bangour the modern ballad beginning

‘Busk ye, busk ye, my bonny bonny bride.’”<sup>3</sup>

と述べているが、チャイルドはJ、K、L版、特にL版においてはハミルトンの作品の方が伝承の版に影響を与えているかも知れないと、伝承バラッドとバラッド詩に付き纏う微妙な問題に触れている。<sup>4</sup> その他の版においても、例えば、A版で、決闘の相手となった9人の兄弟たちの内で‘John’の名前があがっていながら(‘But for to meet your brother J[oh]n,’ 23)、闘いのあとでは‘Now Douglas’ to his sister’s gane,’ (41)と‘Douglas’という名前が出てくると、ハミルトンにおいて‘My brother Douglas’ (93)<sup>5</sup> と出てくることの類似性、I版の‘An wi her tears she bath’d his wounds’ (51)とハミルトンの‘Wash, O wash his wounds, his wounds in tears, / His wounds in tears[...]’ (33-34)という表現、O版の‘dule and sorrow’ (14)とハミルトンにおけるまったく同じ表現 (18, 30, 34, 78)、同じくO版の‘They’ve slain, they’ve slain the comliest swain’ (15)とハミルトンの‘And I hae slain the comliest swain’ (23)等々、いずれがいずれに対して影響を与えたかということは、もはや断定は不可能である。

殺されるのが夫ではなくて恋人であるという設定はJ～P版に沿うものである。しかし、ハミルトンの作品が伝承のどの版とも異なる点はいくつかある。それらを整理することによって、バラッド詩としての独自性をみつめることが小論の目的である。

## II

A. Busk ye, busk ye, my bonny bonny bride,  
Busk ye, busk ye, my winsome marrow,

---

<sup>2</sup> F. J. Child, ed., *The English and Scottish Popular Ballads* (New York: Dover Publications, 1965) 4: 160.

<sup>3</sup> *Minstrelsy of the Scottish Border*, ed. Thomas Henderson (London: George G. Harrap, 1931) 403.

<sup>4</sup> *ESPB* 4: 163n.

<sup>5</sup> From Thomas Percy, ed. *Reliques of Ancient English Poetry*, vol. 2. With Memoir and Critical Dissertation by the Rev. George Gilfillan. Edinburgh: James Nichol, 1858. A rpt. entire from Percy’s last edition of 1794.

Busk ye, busk ye, my bonny bonny bride,  
And think nae mair on the Braes of Yarrow.

B. Where gat ye that bonny bonny bride?

Where gat ye that winsome marrow?

A. I gat her where I dare na weil be seen,

Puing the birks on the Braes of Yarrow. (1-8)

よく引用される有名な出だしである。実は、この詩が伝承のどの版とも決定的に違うのは、詩においてはすでに決闘事件は終わっていて、ハミルトンが‘A’と名付けた男（恋人を殺した男）が残された女（ハミルトンが‘C’と名付ける女）を口説いて、自分と結婚してヤローの村を出てゆこうと誘っているという内容である。<sup>6</sup> ‘B’は事件とはまったく無関係な単なる第三者で、問いを発することによって、それに対する回答から徐々に内容が明らかになるという導入部の役回りを演じている。このように事件に関与しない第三者的質問者の登場は、伝承バラッドでは“Lord Randal” (Child 12)における母親がそうであり、バラッド詩ではJohn Keatsの“La Belle Dame sans Merci”における‘Ah, what can ail thee, wretched wight / Alone and palely loitering?’ (1-2)<sup>7</sup> と問いかける質問者が馴染み深い。

第2スタンザでの‘B’の質問に短く答えた‘A’は、続く第3スタンザで再び女に向かって“Weep not, weep not, my bonny bonny bride” (9) と語りかける。それをさえぎるかのよように第4スタンザで‘B’が再び質問する。

B. Why does she weep, thy bonny bonny bride?

Why does she weep thy winsome marrow?

And why dare ye nae mair weil be seen

Puing the birks on the Braes of Yarrow? (13-16)

今度は‘A’は2つのスタンザを費やして、彼女が恋人を失ったこと、その恋人は自分が殺したことを明らかにする。その後の第7スタンザから第8スタンザの2行目までは‘B’の台詞とは示されていないが、明らかにそうである。

Why rins thy stream, O Yarrow, Yarrow, reid?

---

<sup>6</sup> 初出の*The Tea-Table Miscellany*においては登場人物‘A’、‘B’、‘C’は明示されていないが、話の流れを判りやすくするために話者を表記したThomas Percy編纂の*Reliques of the Ancient English Poetry* (1765)収録の*Reliques*版をアーカイブのテキストとして採用している。

<sup>7</sup> From *The Poetical Works of John Keats*, London: Oxford UP, 1922.

Why on thy braes heard the voice of sorrow?  
And why yon melancholious weids  
Hung on the bonny birks of Yarrow?

What's yonder floats on the rueful rueful flude?

What's yonder floats? O dule and sorrow! (25-30)

質問は‘A’に向かってなされるのではなく、ここでは赤い血に染まったヤロー川に、土手の木に引っ掛かっている衣服に、川に浮いては流れるものに向かってなされている。視線が辺りの情景に向かって動きながら、事件をめぐる質問者の意識が移動しているのである。換言すれば、これは「意識の位相」(‘levels of consciousness’)を表している。実は伝承バラッドにおいては「時の位相」(‘levels of time’)はふんだんに見い出せるが、この「意識の位相」を表現する複雑な技法は無い。<sup>8</sup>

以下、第8スタンザ後半から第16スタンザまで続く‘A’の独り言は、質問者の意識の位相に呼応するかのごとく、話者の意識の動き(=揺れ)を伝える。第9スタンザは、女に向けられた台詞のようでもあり、第10スタンザで“ye sisters, sisters sad”(37)と呼び掛ける女の姉妹たちに向けてのものようでもある。第11スタンザでは、自分が殺した男の無力な盾に向かって語りかける。

Curse ye, curse ye, his useless, useless shield,  
My arm that wrought the deed of sorrow,  
The fatal spear that pierc'd his breast,  
His comely breast on the Braes of Yarrow. (41-44)

一転第12スタンザでは、話者の意識は自分が殺した男そのものに向けられる。

Did I not warn thee, not to, not to luv'e?  
And warn from fight? but to my sorrow  
Too rashly bauld a stronger arm  
Thou mett'st, and fell'st on the Braes of Yarrow. (45-48)

先の質問者の意識が辺りの情景に流れたように、‘A’の意識も次のスタンザでヤロー川の

---

<sup>8</sup> 「時の位相」を示す代表的な例が‘Sir Patrick Spens’(Child 58A)で、王様が船乗りを探す第1、2スタンザ→王様が手紙を書いて浜辺を歩いていた主人公がそれを受け取る第3スタンザ→手紙の内容に喜びと悲しみを示す第4、5スタンザ→出航を命ずる主人公の船長と不吉な予感を述べる部下のやり取り(第6、7スタンザ)→船の沈没(第8スタンザ)→帰らぬ者たちを待ちわびる浜辺の光景(第9、10スタンザ)→海底に眠る主人公たち(第11スタンザ)。このような技法は‘The Braes o Yarrow’のE版でも示され、一般的にこれを「映画的」(‘cinematic’)ないし「モンターージュ」(‘montage’)技法と言い、伝承バラッドの物語技法の巧みさとして説明される。

土手に向けられる。樺の木が芳しく立ち、草が青く茂り、雛菊が咲き、リンゴがたわわに実り、ヤローの川水が美しく流れている、と言う。しかし、今自分が女を連れてゆこうとするツイード川もヤロー川に負けない美しい風景の場所である、と言う。更に一転、女に向かって、なるほど死んだ男は美しく、お前からも愛されたかも知れないが、ヤツはこの俺ほどにはお前を愛してはいなかったのだ、と食い下がる。そして、

Busk ye, then busk, my bonny bonny bride,  
Busk ye, busk ye, my winsome marrow,  
Busk ye, and luv me on the banks of Tweed,  
And think nae mair on the Braes of Yarrow. (61-64)

と言って、彼の語り掛けを終える。

次の第17スタンザで、初めて‘C’（女）が登場する。以下、最終スタンザの一つ前、第29スタンザまで今度は一方的に女の語りである。ここでも女の意識の位相が展開する。第17スタンザは、恋人を殺した人をどうして愛せましょう、と男に向かって言っているが、第18スタンザは、ヤローの土手に向かって、殺されて横たわる恋人を雨露で濡らさないで、と語り掛ける。一転次のスタンザでは、自分が縫った緑の上着と深紅のヴェストを身につけて出かけていった恋人の姿に悲しくも思いを馳せる。恋人の運命も知らず歌をうたっていた自分の愚かさを嘆き (st. 21)、次には（伝承バラッドの内容から推察して）恋を許さなかった父親と、恋人を殺した男に向けられた二つの気持ちを一つのスタンザに包み込んでいる。

What can my barbarous barbarous father do,  
But with his cruel rage pursue me?  
My luvver's blood is on thy spear,  
How canst thou, barbarous man, then woove me? (85-88)

続く第23スタンザと第24スタンザの前半では、自分の不幸を嘲笑うだろう姉妹や兄のダグラスのことを想像する。そして再び、上に引用の第22スタンザ後半の2行の内容を繰り返す。次のスタンザから雰囲気は一変する。

Yes, yes, prepare the bed, the bed of luvve,  
With bridal sheets my body cover,  
Unbar, ye bridal maids, the door,  
Let in the expected husband lover.

But who the expected husband husband is?

His hands, methinks, are bath'd in slaughter:  
Ah me! what ghastly spectre's yon  
Comes in his pale shroud, bleeding after?

Pale as he is, here lay him, lay him down,  
O lay his cold head on my pillow;  
Take aff, take aff these bridal weids,  
And crown my careful head with willow.

Pale tho' thou art, yet best, yet best beluv'd,  
O could my warmth to life restore thee!  
Yet lye all night between my breists,  
No youth lay ever there before thee.

Pale, pale indeed, O lovely lovely youth,  
Forgive, forgive, so foul a slaughter,  
And lye all night between my breists,  
No youth shall ever lye there after. (97-116)

一般的に伝承バラッドでは、死んだ恋人は「肉体を持った亡霊」(corporeal revenant)として生きている恋人の前に現われるが、ここでは、女は死んだ恋人の亡霊を彼女の意識の中に幻覚(hallucination)として見ているのである。バラッド詩が模倣から逸脱してゆく場合の一つの大きな特徴である「心理化」(psychologization)を「幻覚」という形で実現している最初の、重要な例である。<sup>9</sup>

詩の最終スタンザでは、再び‘A’が登場して、女の幻覚を打ち砕き、かつての恋人はヤロー川の土手に死体となって横たわっているのだと、冷厳な現実を突き付ける。

A. Return, return, O mournful, mournful bride,  
Return and dry thy useless sorrow:  
Thy luvver heeds none of thy sighs,  
He lyes a corps in the Braes of Yarrow. (117-20)

### III

---

<sup>9</sup> ちなみに、このような手法はのちに Thomas Hardy が得意としたところであった。例えば、昔の恋人あるいは死んだエマ夫人に対する詩人の意識の疼きを幻覚に基づく亡霊を登場させる形で語る‘Her Immortality’、‘Something Tapped’ その他多くのバラッド詩を残している。

James Reed は、数々のボーダー・バラッドの舞台となった国境地方の歴史を訪ねて優れた記録を残しているが、「地名」が喚起する古の戦いと恋の舞台を次のように集約している。

“There are few places on earth where one is more aware of the pressure of the past than in Elsdon, where the very stones breathe strange and noble consolations of old, unhappy, far-off things, and battles long ago; but one of them is the Yarrow Valley, where tragic tradition runs like blood into the Tweed, and where the place-names so familiar to Scott and Hogg awaken now the wailing echoes of a remote violence, not of theft, but of love, and a fear, not of affray, but of the strange inhuman powers which haunted the wide, quiet valleys.”<sup>10</sup>

‘Elsdon’は、1388年の戦いをうたった

‘The Battle of Otterburn’ (Child 161)でうたわれる9,000人近いイングランド軍の死者たちが埋葬された地、<sup>11</sup> そして ‘Yarrow Valley’ は、代表的な ‘The Braes o Yarrow’ や ‘Rare Willie Drowned in Yarrow’ (Child 215)その他数々の恋と戦いのバラッドの舞台である。ヤロー川は聖メアリー湖から流れ出て、エトリックの森をうねり、セルカークの少し北フィリップ



ホーでエトリック川と合流してツイード川に向かう流れであるが、湖の東の端からヤロー川に沿って下ってゆくと、すぐ近くの農家の牧場内に今や崩れかかった石造りの建物が見えてくる。辺りに放牧された牛を恐々と避けて近づいてみると、空洞の中は悪臭を放つ牛の糞で足の踏み場も無く、朽ちかけた建物の天辺からは木と草が無造作に生えている。<sup>12</sup> これが16世紀の ‘Dryhope Tower’の廃墟で、“The Braes o Yarrow”において ‘the Flower

<sup>10</sup> James Reed, *The Border Ballads* (London: U of London, the Athlone P, 1973) 135.

<sup>11</sup> Cf. “Ther was slayne vpon the Ynglyssh perte, / For soth as I yow saye, / Of nyne thowsand Ynglyssh men / Fyve hondert cam awaye.” (A; st. 65); Reed 134. ‘Otterburn’の南東3マイルの地。

<sup>12</sup> Cf. “The dwellings of the ballads are the bastles, peles and tower-houses built largely along the valley folds of the Middle and West Marches where they supply still a grim punctuation to most Border prospects. Some towers, like Kirkandrews on the Esk, and the former vicarage at Elsdon in Redesdale, are still inhabited; many English bastles remain in use as farm buildings, but most towers, in spite of their formidable strength, have decayed, pillaged for stone, and stand in farmyards or on open pasture and fell, clung about with moss and turf and lichen like giant tombs. And yet[...]something endures in the stones, and the memory is rich[...].” (Reed 29)

o Yarrow’ (B)、‘the Rose of Yarrow’ (D, L)、‘The fairest flower in Yarrow’ (L) とうたわれた Mary Scott の館であった。

At Dryhope lived a lady fair,  
The fairest flower in Yarrow,  
And she refused nine noble men  
For a servan lad in Gala.

Her father said that he should fight  
The nine lords all to-morrow,  
And he that should the victor be  
Would get the Rose of Yarrow. (L;1-8)

「ヤローの花」とうたわれたこの女主人公の歴史的背景を巡って、John Marsdenが面白い想像をめぐらしている。<sup>13</sup>

“The heroine is identified by the ballad-maker as a lady of Dryhope, ‘the fairest flower in Yarrow’. The victor of the combat, proposes the second stanza, ‘would get the Rose of Yarrow’. The only lady renowned in the Border tradition as ‘the Rose of Yarrow’ was Marion, or Mary, Scott, the daughter of John Scott of Dryhope. She became, in 1576, the wife of Walter Scott of Harden, a formidable reiver[...].

‘Auld Wat of Harden’ was certainly no ‘servan’ lad in Gala’ and neither was he slain in any treacherous affray on the braes of Yarrow, but *it does seem more than likely that so famed a Border beauty might have been embroiled in a passionate, youthful romance, meeting with paternal disapproval and a tragic conclusion, before she met the man who was to become her husband.*

The text of Child’s version L of *The Dowie Dens* fits the historical bill well indeed, and places the events of the ballad at some point before the year 1576.”<sup>14</sup> (My emphasis)

‘L’版は1890年7月の*Blackwood’s Magazine* (CXLVII, 741)に発表されたものだが、チャイルドが“communicated by Professor John Veitch, as received from William Welsh, a Peeblesshire cottar and poet, born 1799, whose mother used to recite the ballad, and whose grandmother had a copy in her father’s handwriting.”<sup>15</sup>と説明している通りであるとすれば、スコットの版よりもはるかに古く、これがこのうたのオリジナル版であるか

<sup>13</sup> 殺された男の歴史的推測をめぐっては、*Minstrelsy* 402-3, *ESPB* 4: 163-64 参照。

<sup>14</sup> John Marsden, *The Illustrated Border Ballads*, photography by Nic Barlow (London: Macmillan, 1990) 80.

<sup>15</sup> *ESPB* 4: 173.



も知れない。<sup>16</sup>

マースデンの想像に加担すれば、「ヤローの花」と称えられた美しい娘メアリー・スコットをめぐって、彼女の結婚前にこの歌でうたわれているような悲しくも情熱的な物語が作られたことになる。歌では、彼女は最後に悲しみに胸張り裂けて死ぬことになるが、<sup>17</sup> 現実には彼女は死んではおらず、その後1576年にWalter Scott of Hardenと結婚している。結婚前に実際にそのような恋愛事件があったのか、それとも、これは彼女をめぐって作られたまったく架空の物語なのか。チャイルドも言うように、<sup>18</sup> この種の事件は人間の歴史の中でよくあることで、真相はわからない。真相がわからないついでに更に想像をたくましくすれば、ハミルトンはこの‘L’版を知った上で現実のメアリー・スコットを念頭において作品を作ったのか。恋人がミルク色の白い馬に乗って決闘に出かけたこと(L版, st. 4; Hamilton, st. 20)、殺された恋人がヤロー川に投げ込まれたこと(L版, st. 9; Hamilton, st. 8)とも、両者に共通する点である。するとハミルトンの作品における話者‘A’は、メアリー・スコットがその後結婚したWalter Scott of Hardenということになるか。‘Dryhope Tower’は1592年国王ジェームズ六世の命令によって取り壊しの運命を迎えたという。<sup>19</sup> 結局、取り壊しは実行されなかったが、館そのものが廃墟と化していったことは上に述べた通りである。想像するに、ハミルトンもその地を訪ね、ヤロー川のほとりに佇んでこの廃墟を目にし、「ヤローの花」とうたわれた彼女をめぐって、事件の後日談として彼の作品を作ったのか。そうであれば、彼の詩に設定された三人の登場人物‘A’、‘B’、‘C’ともに一つの事件をめぐって様々に意識が移ってゆくその「意識の位相」とは、取りも直さず彼の地に佇んだ作者自身の「意識の位相」として大いに納得がいつてくる。A. B. Friedmanはこの作品について、“The poem has much ballad-like language but a most unballad-like discursiveness.”<sup>20</sup>と一言で片付けているが、フリードマンが言う「とりとめの無さ」(“discursiveness”)の実態こそ、このような伝承バラッドに向かう時の詩人の意識なのである。バラッド詩が単なる模倣から逸脱してゆくときの質的变化をハミルトンの作品は端的に示しているのである。

#### IV

<sup>16</sup> John Veitch がそのように考えていることについては Marsden 79 参照。Veitchの*History and Poetry of the Scottish Border* (Edinburgh: William and Blackwood, 1893)については未見。

Cf. ‘An aye she screighed, and cried Alas! / Till her heart did break wi sorrow, / An sank into her fai<sup>17</sup>ther’s arms, / Mang the dowie dens o Yarrow.’ (L; 77-80)

<sup>18</sup> Cf. *ESPB* 4: 164.

<sup>19</sup> Cf. Reed 144.

<sup>20</sup> A. B. Friedman, *The Ballad Revival* (U of Chicago P, 1961) 160.

上に述べたハミルトンの「意識の位相」とは、換言すれば、詩人たち（および、われわれ読者）が伝承バラッドに触れて喚起される想像の展開の姿である。そして、その有名な例がロマン派詩人William Wordsworthその人であった。ワーズワースは三度ヤローをうたっている。一度目はヤローの近くまで行きながら訪れなかったときの歌“Yarrow Unvisited”（1803年制作、1807年出版）、二度目は遂にヤローを訪れてうたった歌“Yarrow Visited”（1814年制作、1815年出版）、そして三度目はスコットと一緒にハイランド地方を旅したときの一連のうた*Yarrow Revisited and Other Poems*（1831年制作、1835年出版）である。

“Yarrow Unvisited”の冒頭、ワーズワースは次の言葉を添えている。

“See the various Poems the scene of which is laid upon the banks of the Yarrow; in particular, the exquisite Ballad of Hamilton beginning —

‘Busk ye, busk ye, my bonny, bonny Bride,  
Busk ye, busk ye, my winsome Marrow!’”<sup>21</sup>

ワーズワースがハミルトンの作品を念頭に置いていたことはこの頭注からも明らかである。ハミルトンの作品が収められているPercyの*Reliques*についてワーズワースが、これによって英国詩は復活した、そして自分自身を含めて当時の詩人でこの*Reliques*の恩恵を受けていない者は一人もいないと明言したことも余りに有名であるが、バラッド詩の系譜をたどる上で重要なこの経緯を今一度ここで整理しておこう。

‘Essay, Supplementary to the Preface’（1815）の冒頭ワーズワースは、若者にとって詩は恋と同じ情熱であり、中年から老年に向かうにつれて、人生の些事・苦痛から己れを護り慰めてくれる一種の宗教的なものになると述べたうえで、「詩と人生」という視点から英国詩の歴史を整理してゆく。18世紀以前の部分についてはここでは省略するとして、*Reliques*の登場をめぐる当時の受容を正確に伝えるものとして、まず次の文章を引用しよう。

“Next in importance to the Seasons of Thomson, though at considerable distance from that work in order of time, come the Reliques of Ancient English Poetry; collected, new-modelled, and in many instances (if such a contradiction in terms may be used) composed by the Editor, Dr. Percy. This work did not steal silently into the world, as is evident from the number of legendary tales, that appeared not long after its publication; and had been modelled, as the authors persuaded themselves, after the old Ballad. The Compilation was however ill suited to the then existing taste of city society; and Dr. Johnson, ’mid the little senate to which he gave laws, was not sparing in his exertions to make it an object of contempt. The critic triumphed, the legendary

---

<sup>21</sup> From *The Poetical Works of William Wordsworth*, 2nd ed., Vol. 3, ed. Ernest de Selincourt, Oxford UP, 1954. 以下、ワーズワースの作品からの引用はすべてこの版による。

imitators were deservedly disregarded, and, as undeservedly, their ill-imitated models sank, in this country, into temporary neglect; while Bürger, and other able writers of Germany, were translating or imitating these Reliques, and composing, with the aid of inspiration thence derived, poems which are the delight of the German nation. *Dr. Percy was so abashed by the ridicule flung upon his labours from the ignorance and insensibility of the persons with whom he lived, that, though while he was writing under a mask he had not wanted resolution to follow his genius into the regions of true simplicity and genuine pathos (as is evinced by the exquisite ballad of Sir Cauline and by many other pieces), yet when he appeared in his own person and character as a poetical writer, he adopted, as in the tale of the Hermit of Warkworth, a diction scarcely in any one of its features distinguishable from the vague, the glossy, and unfeeling language of his day.* I mention this remarkable fact with regret, esteeming the genius of Dr. Percy in this kind of writing superior to that of any other man by whom in modern times it has been cultivated.” (My emphasis)<sup>22</sup>

ワーズワースはここで、パーシィが当初匿名で示した‘true simplicity and genuine pathos’を持った世界への共感を実名で詩を書くようになって失なっていたことに対して遺憾の意を表明しているが、彼自身が *Lyrical Ballads* 初版(1798)とその後の改訂を通して同じ轍を踏んでいることは誠に皮肉である。<sup>23</sup> それはともかく、ワーズワースはこのあと、James Macphersonの *Ossian* (正式には、*Fragments of Ancient Poetry, Collected in the Highlands of Scotland, and Translated from the Galic or Erse Language*, 1760) 受容に触れたうえで、*Reliques*の偉大なる功績について次のようにまとめているのである。

“Contrast, in this respect, the effect of Macpherson’s publication with the Reliques of Percy, so unassuming, so modest in their pretensions! — I have already stated how much Germany is indebted to this latter work; and for our own country, its poetry has been absolutely redeemed by it. I do not think that there is an able writer in verse of the present day who would not be proud to acknowledge his obligations to the Reliques; I know that it is so with my friends; and, for myself, I am happy in this occasion to make a public avowal of my own.”<sup>24</sup>

さて、話をヤロー訪問に戻そう。1803年(ワーズワース 33歳の時)妹ドロシーと最初にスコットランドを旅したとき、ヤロー川の近くを通りながら結局あえてその地を訪れなかった。「ちょっと回り道をしてヤローの丘を眺めましょう」というドロシーに対して詩人はこう応える。

<sup>22</sup> *Poetical Works* 2 (1952): 421-22.

<sup>23</sup> 山中光義「Wordsworth のバラッド詩 — *Lyrical Ballads* 初版とその後の改訂 —」『文芸と思想』(福岡女子大学) 40 (1976)参照。

<sup>24</sup> *Poetical Works* 2: 424-25.

“What’s Yarrow but a river bare,  
That glides the dark hills under?  
There are a thousand such elsewhere  
As worthy of your wonder.” (25-28)

このような言われ方をして悲しそうな表情を示すドロシーに、詩人は次のように言って弁解する。

“Let beeves and home-bred kine partake  
The sweets of Burn-mill meadow;  
The swan on still St. Mary’s Lake  
Float double, swan and shadow!  
We will not see them; will not go,  
To-day, nor yet to-morrow;  
Enough if in our hearts we know  
There’s such a place as Yarrow.

“Be Yarrow stream unseen, unknown!  
It must, or we shall rue it:  
We have a vision of our own;  
Ah! why should we undo it?  
The treasured dreams of times long past,  
We’ll keep them, winsome Marrow!  
For when we’re there, although ’tis fair,  
’Twill be another Yarrow!

“If Care with freezing years should come,  
And wandering seem but folly, —  
Should we be loth to stir from home,  
And yet be melancholy;  
Should life be dull, and spirits low,  
’Twill soothe us in our sorrow,  
That earth hath something yet to show,  
The bonny holms of Yarrow!” (41-64)

この大地にヤローのような美しいところがあるということで人生の悲しみは慰められる、と詩人は言う。しかし、詩人が実際にヤローを訪れることを躊躇した本当の理由は、もし現実のヤローを訪れば、「幻影」<sup>25</sup> (‘vision’)、「過ぎ去った昔の思い出ふかい夢のかずかず」(‘The treasured dreams of times long past’)を破られるかも知れないという恐れであった。現実を直視しながらもなお夢をいだき続ける自信を詩人は持てなかった。

1814年二度目のスコットランド訪問の時、ワーズワースは James Hogg の案内で遂にヤローを訪れた。<sup>26</sup>

And is this — Yarrow? — This the Stream  
Of which my fancy cherished,  
So faithfully, a waking dream?  
An image that hath perished! (“Yarrow Visited”, 1-4)

33歳のとき夢が現実によって打ち破られることを恐れた詩人は、44歳となった今、目の前の現実をただ直視する。

---

<sup>25</sup> “Yarrow Unvisited”の訳語は田部重治訳『ワーズワース詩集』（岩波文庫、昭和32年第18刷改版）による。

<sup>26</sup> 同年生まれのホッグが亡くなった時（1835年11月21日）、ワーズワースはこの時のヤロー訪問を思い起こして次のような追悼の詩を作っている。

“When first, descending from the moorlands,  
I saw the Stream of Yarrow glide  
Along a bare and open valley,  
The Ettrick Shepherd was my guide.

When last along its banks I wandered,  
Through groves that had begun to shed  
Their golden leaves upon the pathways,  
My steps the Border-minstrel led.

The mighty Minstrel breathes no longer,  
’Mid mouldering ruins low he lies;  
And death upon the braes of Yarrow,  
Has closed the Shepherd-poet’s eyes:

.....  
No more of old romantic sorrows,  
For slaughtered Youth or love-lorn Maid!  
With sharper grief is Yarrow smitten,  
And Ettrick mourns with her their Poet dead.”

(“Extempore Effusion upon the Death of James Hogg”, 1-12, 41-44.)

— a silvery current flows  
With uncontrolled meanderings;  
Nor have these eyes by greener hills  
Been soothed, in all my wanderings.  
*And, through her depths, Saint Mary's Lake*  
*Is visibly delighted;*  
*For not a feature of those hills*  
*Is in the mirror slighted.* (9-16; my emphasis)

詩人が念願のヤローの丘に立って今見つめているのは、あるがままの現実である。聖メアリー湖が周囲の山々の影の一つだにおろそかにせず映し出しているその静かな美しい姿である。前は、同じ湖に浮かぶ白鳥の姿を映す鏡のような湖上を思い描きながら、あえてそれを見ようとしなかった。大きな違いである。「やさしく曇りをおびた輝き」<sup>27</sup>（‘A tender hazy brightness’, 20）、「凡ての無益な落胆をしめ出してしまふ／穏かな希望にみちた曙」（‘Mild dawn of promise! that excludes / All profitless dejection;’, 21-22）—現実の光に照らされても消えることの無い、静かで柔らかい美しさがあることを感得し、詩人は自信を甦らせる。

But thou, that didst appear so fair  
To fond imagination,  
Dost rival in the light of day  
Her delicate creation:  
Meek loveliness is round thee spread,  
A softness still and holy;  
The grace of forest charms decayed,  
And pastoral melancholy. (41-48)

そのような気分の中で詩人は、再び「あのうた」を「回想」（‘recollection’, 24）する。

Where was it that the famous Flower  
Of Yarrow Vale lay bleeding?  
His bed perchance was yon smooth mound  
On which the herd is feeding:  
And haply from this crystal pool,  
Now peaceful as the morning,

<sup>27</sup> “Yarrow Visited” の訳語は豊田実訳『ワーズワース詩抄』（北星堂、昭和44年）による。

The Water-wraith ascended thrice —  
And gave his doleful warning.

Delicious is *the Lay* that sings  
The haunts of happy Lovers,  
The path that leads them to the grove,  
The leafy grove that covers:  
And Pity sanctifies *the Verse*  
*That paints, by strength of sorrow,*  
*The unconquerable strength of love;*  
Bear witness, rueful Yarrow! (25-40; my emphasis)

ヤローの谷に血を流して横たわる ‘the famous Flower of Yarrow Valley’ — これは恋人を奪われた女ではなく、殺された男のことを言っている。女を ‘The Flower (or Rose) of Yarrow’ とうたっているのはB、C、D、Lの各版、それに対して、女も男も ‘the rose o Yarrow’ とうたっているのがC版、男を ‘rose’ ないし ‘flower’ とうたっているのがF、L版。ハミルトンでは男に対しても女に対してもそのような形容は一切使われていない。従って、ワーズワースがハミルトン版だけでなく、伝承の他の版も承知していたことを示唆している。そして何よりも、この詩でワーズワースは、ハミルトンの場合のように事件の事後に対する想像ではなくて、殺されて横たわる男への想い、「うちまかし難い愛の力を、かなしみの力に依って描き出す」伝承のうたそのものの中に想像を巡らすのである。視覚に左右されることなく、ヤローのまことの姿 (“Thy genuine image”) を心の内に獲得しえた喜びを、次のようにうたってこの詩は締め括られる。

I see — but not by sight alone,  
Loved Yarrow, have I won thee;  
A ray of fancy still survives —  
Her sunshine plays upon thee!  
Thy ever-youthful waters keep  
A course of lively pleasure;  
And gladsome notes my lips can breathe,  
Accordant to the measure.

The vapours linger round the Heights,  
They melt, and soon must vanish;

One hour is theirs, nor more is mine —  
Sad thought, which I would banish,  
But that I know, where'er I go,  
*Thy genuine image, Yarrow!*  
Will dwell with me — to heighten joy,  
And cheer my mind in sorrow. (73-88; my emphasis)

ヤロー再訪は、この伝承バラッドを世に出したスコットと一緒に1831年秋（61歳の時）  
になされた。

Past, present, future, all appeared  
In harmony united,  
Like guests that meet, and some from far,  
By cordial love invited.

*(Yarrow Revisited and Other Poems, I, 29-32)*

今や詩人の心の中では、過去・現在・未来が偽りや飾りの無いありのままの心を込めた愛  
情に包まれて溶け込んでいる。

And what, for this frail world, were all  
That mortals do or suffer,  
Did no responsive harp, no pen,  
Memorial tribute offer?  
*Yea, what were mighty Nature's self?*  
*Her features, could they win us,*  
*Unhelped by the poetic voice*  
*That hourly speaks within us?*

Nor deem *that localised Romance*  
Plays false with our affections;  
Unsanctifies our tears — made sport  
For fanciful dejections:  
Ah, no! *the visions of the past*  
*Sustain the heart in feeling*  
*Life as she is — our changeful Life,*  
With friends and kindred dealing. (81-96; my emphasis)



自然の姿を自らの内なる詩的声によって獲得し得るといふ、詩人としての静かな自信が語られている。‘that localised Romance’ とはきっとヤロー川を舞台にした「あのうた」を指しているのであろうが、「過去の幻影」が破られることを恐れた28年前と違って、今、詩人は、そのような物語の中にこそ有為転変の人生に「真（まこと）の哀感」（‘genuine pathos’）を感じる心境に到達したのである。

若き日の情熱が紡ぎ出すヤロー川の理想の姿から、静閑の内に直視して観るヤロー川の美しい姿、そして最終的に内なる詩的声によって感得する自然の姿 — ヤロー川をめぐって示したワーズワースの三様の反応は、先に述べた ‘Essay, Supplementary to the Preface’ 冒頭の「詩と人生」そのものを自ら映し出しているのである。

V

スコットは、*Marmion: A Tale of Flodden Field* (1808) の第2 Cantoで、聖メアリー湖畔の風景を次のように描写している。

Oft in my mind such thoughts awake,  
By lone Saint Mary’s silent lake;  
Thou know’st it well, — nor fen, nor sedge,  
Pollute the pure lake’s crystal edge;  
Abrupt and sheer, the mountains sink  
At once upon the level brink;  
And just a trace of silver sand  
Marks where the water meets the land.  
*Far in the mirror, bright and blue,*  
*Each hill’s huge outline you may view;*  
Shaggy with heath, but lonely bare,  
Nor tree, nor bush, nor brake, is there,  
Save where, of land, yon slender line  
Bears thwart the lake the scatter’d pine.  
*Yet even this nakedness has power,*  
*And aids the feeling of the hour:*  
Nor thicket, dell, nor copse you spy,  
Where living thing conceal’d might lie;  
Nor point, retiring, hides a dell,  
Where swain, or woodman lone, might dwell;

*There's nothing left to fancy's guess,  
You see that all is loneliness:  
And silence aids — though the steep hills  
Send to the lake a thousand rills;  
In summer tide, so soft they weep,  
The sound but lulls the ear asleep;  
Your horse's hoof-tread sounds too rude,  
So stilly is the solitude.*

(“Introduction to Canto Second”, 146-73; my emphasis)<sup>28</sup>

周囲の丘の影が鏡のような湖上に映し出されるという表現は、ワーズワースの見方とまったく同一のものである。スコットがここで ‘even this nakedness has power, / And aids the feeling of the hour.’ と言っているものこそ、ロマン派詩人に共通の、静けさの中に孤独を感じる詩情である。その孤独感とは、装飾された自然がもたらす詩情ではなく、国境地方を舞台にした古の人々の生き様を思い起こすときに喚起される類の、人間に対する切ない哀感とでも言い換えられようか。<sup>29</sup>

ヤロー川は、スコットランド詩人ハミルトンだけでなく、イングランドのロマン派詩人ワーズワースに対しても、揺らぎゆく詩情の良き題材を提供した。伝承バラッドが詩人たちに影響を及ぼしてゆく姿は、このように様々である。ヤロー川は伝承バラッドの象徴的舞台として、悠久の流れの中で様々のバラッド詩を、そしてまた、バラッド詩ではなくてもワーズワースのような作品を、生み出していったのである。バラッド詩の系譜をこのような広がりの中で捉えてみることもまた、バラッドの持つ潜在的な魅力を確認する一つの試みであると言えるだろう。

[本論は、『文芸と思想』（福岡女子大学）59 (1995) 掲載の初出論文に加筆訂正を加えたものである。]

---

<sup>28</sup> From *The Poetical Works of Sir Walter Scott*, Edinburgh: Robert Cadell, 1841.

<sup>29</sup> Cf. ‘The still, sad music of humanity’ (“Lines Composed a Few Miles above Tintern Abbey”, 91)